RCD工法から30年

ウイズ〝ダム〟ナイト後半

工学会シンポ

ダム工学会（入江洋樹会長）創立20周年記念の4夜イベント「今宵、ダムとともに（ウイズ〝ダム〟ナイト）」の後半（第3、4夜）が11月29、30日に東京都文京区の東大工学部1号館で開かれた＝写真は第3夜。

ダムの魅力を4部構成で発信したこの一般公開シンポジウムは、前半テーマが「ダムの歴史」と「水力発電」で10月末に終了。今回行われた第3夜は「世界をリードする日本のダム施工法。RCD工法から台形CSGへ」、4夜は八ッ場ダムの問題を念頭に置いた「利根川・荒川の治水と利水」がテーマ。

このうち、RCD工法を解説した長瀧重義愛知工業大学特任教授は、「島地川ダム、大川ダム、新中野ダムの〝RCD3ダム〟施工終了は30年前の1980年のこと。日本のダム技術が世界トップクラスと認められた記念すべき年だった」と振り返った。また、外部コンクリート先行打設後に内部コンクリートを打つ〝額縁型〟と呼ばれた従来のRCD工法が、昨今の技術開発の結果、内部コンクリート打設直後、これを追いかけるように外部コンクリートを打ち継ぐ「巡航RCD工法」に進化した際のエピソードを披露した。

4夜は虫明功臣東大名誉教授、宮村忠関東学院大同、横塚尚志日本ダム協会専務理事らが登壇。それぞれ専門分野から「未完の利根川治水」を詳説した。

図２　建設通信新聞 2010 年 12 月 1 日第 2 面